

WebCT 利用の英語 (TOEIC) クラス

人文学部 教授 草薙 太郎

WebCT の利用について、ここでは教養教育の英語、それも TOEIC クラスに限って報告したい。そこから富山大学での外国語教育に関する e-learning の問題、情報処理教育との連携についても考察したい。

キーワード：外国語教育、WebCT、TOEIC、e-learning、外国語教育と情報処理教育の連携

1. はじめに

TOEIC の点数を上げる目的もあって、すでに富山大学のホームページにアルク・ネットアカデミーというソフトが掲載され、学生は自学自習できるようになっている。一方、英国の BBC 放送は、ネット上で音声と映像を組み合わせた（つまりテレビ）の形で、世界のニュースを配信している。これは、保存さえしなければ無料で視聴できる。保存し、何度も再現して英語のリスニング教材にするには料金が発生する。教員がその場で WebCT 上に設問をつくって学生に課題としてやらせれば、無料で一種のリスニング教材として利用できる。

WebCT に上記二つの教材を取り込み、BBC 放送を視聴するのとネットアカデミーとどちらが良いか、学生に両方を体験してもらった上でアンケートをとった。（アンケートも WebCT で簡単に出来る。）その結果が次のようになった。以下、この問題を解説することで、同時に私が行った WebCT 利用の実践報告と問題点の指摘をしたい。

2. アンケート結果

クラス名：英語 A 2-1 3

BBC が良いとする学生：13 人

両方併用すべきとする学生：17 人

アカデミーが良いとする学生：9 人

（両方否定）別のものを希望する学生：2 人

クラス名：英語 A 2-3 1

BBC が良いとする学生：22 人

両方併用すべきとする学生：2 人

アカデミーが良いとする学生：11 人

（両方否定）別のものを希望する：1 人

3. 主な意見

アンケートに付された主な意見としては、まず、BBC 支持派では、TOEIC の受験対策にはアカデミーが良いかもしれないが、高校時代からの延長で、飽きている面があるし、実際、英米人はあのようによく話すわけではない。BBC は話題性にも富むし、聴けるようにならねばと思って、自然に集中してしまう等々であった。

一方アカデミー支持派では、BBC はアナウンサー以外の言葉はほとんど聞き取れず、単語も多く、教育的でない。面白くなくても、まず TOEIC の点数だと思うと、アカデミーをやらなければならない、といったものである。

4. 理学部と工学部の違い

英語 A 2-1 3 のクラスは理学部の学生なのでアカデミーと BBC の両方をという声が多く、英語 A 2-3 1 のクラスは工学部なので、とにかく実践をということ、BBC 派が多くなったと推定できる。これは授業中の様々な反応から伺われ、そもそも理学部は閉じた学問体系を重視し、工学

部は実践を重んじるという論理的な思考上の推定とも合致する。

現在なぜ大学改革で TOEIC が重視されるかといえば、企業が重視するからであり、企業は実践的に海外の取引先、支店などとの交流を社員にやらせる必要から言っているのであって、指摘するまでもないことながら、単に点数のみに注目しているわけではない。こうした事情は教員を通じて、工学部の学生に、より強く伝わり、理学部では、閉じた学問体系の中の教育という面が強調されるという点で、実践とは切り離れた英語能力の練磨を重視する学生が多いのではなかろうか。

5. TOEIC の点数と外国語教育担当教員の立場の弱さ

前項から導き出される問題点をここで指摘したい。前述のように、企業就職を考えれば、海外と競争し、海外に支店のある企業でないと生き残れない現状から外国語（特に英語）は重視するが、何が何でも TOEIC の点数が高ければいいのではなく、英語による取引先との交渉力が期待され、幅広い教養があつて、例えば自分の卒論を英語でスムーズに紹介できる力などが、より強く求められる。少なくとも工学部、経済学部、理学部はそうだと考察出来る。

こうした「事情」については大学の外との接触が少ない外国語教育担当教員だけで話し合っている、あまり情報が入らず、一方、次に述べる「立場の弱さ」から外国語教育担当教員が改革要請に引きずり回される恐れがある。

富山大学では外国語教育担当教員（教授会等を通じて意見表明できる教員）が人文学部と人間発達科学部の一部にしかない立場の弱さがあると思われる。情報処理教育部会が、人間発達科学部、経済学部、工学部、理学部の多くの教員が参加し、学部長経験者も複数いる事情とは違う。

そこから大学評価機構、文部科学省から求められる改革要請への過剰反応（詳細は後述）が生まれる背景になる。

6. e-learning と創意工夫

ところで「WebCT は自分で e-learning を創造するもの」という側面がある。英語関係の教員が集まって、オリジナルな TOEIC 自習のための問題を沢山つくって、創意工夫をした他大学の WebCT 使用をする例がある。

本稿で報告するクラスについても、私自身、80 くらいの TOEIC 風の問題をオリジナルに作って授業で WebCT にのせて学生の自習に役立たせ、また授業の教材に使った。

この「創意工夫」という点は意外に重要である。教養教育の「中期目標」に明記されているにも関わらず、英語分科会にネットアカデミーの使用など e-learning が広まらない理由は、教員の「創意工夫」が生かされないとの誤解があるからではないだろうか。（e-learning を推進する場合でも、既存のソフト使用だけを念頭におき、教員の創意工夫を忘れている場合が多く、なぜか富山大学の外国語教育関係者に広く行き渡った「誤解」である。）

英語分科会所属の多くの教員が、従来の普通教室でのテキスト講読中心の授業を改めたがらないのは、そうした授業の方が「教員の創意工夫」が生かされると思うからではないだろうか。人間は、創意工夫をしないことには本気ではやる気を出せない。

それは、さらに意外なこととも関係する。端末室ではこの四月からリアルプレイヤーの状況が悪く（WebCT を含め端末室の新システムの中でリアルプレイヤーが利用できない事態が続いた）BBC 放送が視聴しにくかった。センター職員はそれこそ本当に力をいれて BBC 放送が視聴できるようにご努力くださった。学生のニーズを肌で感じていらっしやったものと、私は感謝している。

同時に、ここまで関係者がご努力くださる陰には関係者の技術者魂、すなわち「創意工夫」があると指摘したい。システムを構築し、不具合があれば何とか工夫しようとする中に「創意工夫」の余地があつて人は努力する。

7. 情報処理教育とのゆるやかな連携の必要

前項で指摘したように、コンピュータの技術的なことに「創意工夫」の余地を見出し努力する教員もいれば、テキスト講読に「創意工夫」の余地を見出し努力する教員もいる。

かつては文学を中心としたテキスト講読が外国語学習の主流であった。それはテキスト講読にこそ「創意工夫」があり、「人生いかに生きるべきか」という最も重要な「創意工夫」が見出されると人々が考えたからである。現在はそうした考え方は少数派になり、替わって色々な意味で問題解決のための「創意工夫」（広い意味での技術）重視が主流になっていると考えられる。

これを大雑把に「哲学派」と「技術派」としよう。余程の工夫をしなないと、いくら研修会をやっても、現在の富山大学で外国語教育担当教員のすべてについてコンピュータ能力が向上し、e-learning 等がさかんになるとも思えない。その理由は外国語教育担当教員の多くが「哲学派」であって「技術派」のように自己の技術を磨くことに意義も見出さず、「創意工夫」の喜びを感じないからではなかろうか。

これが理系教員と外国語教育担当教員の一見絶望的な壁をつくりだす。

英語分科会では、TOEIC 自習システムの運用を理工系の先生にやってもらえないかという意見が、未だに出たりすると聞く。

これについては TOEIC 自習システムが初めて導入されたとき、情報処理教育部会で運用の指導を、という要請があり、検討の結果、TOEIC 自習システムの運用は、授業で時間をとって教員が教えるほどのことではない、という結論に達し、ちょっとした「お知らせ」程度で済むものとの認識で一致し、部会でも確認された。

それはかなり前の話であり、現在はもっと情報処理教育は進んでいるし学生もコンピュータに慣れてきている。単にアルク・ネットアカデミーを利用するだけなら、「技術的には」現在既にある Web 上の注意書きだけで済み、もはや指導の必要はないのではないだろうか。

問題は学生に外国語を学ぶ必要があると感じさせる動機付けである。「技術」ではないのだ。情

報処理科目担当教員の一人である私からすれば、英語分科会と情報処理教育部会の認識の差が、相当なものだと指摘せざるを得ない。

そこで提唱したいのは英語を中心とした外国語教育担当教員と、情報処理科目担当教員を中心とした理系の教員、大学院生等との「ゆるやかな」連携である。

この「ゆるやかな」というところがポイントで、外国語教育担当教員と、先述した情報処理科目担当教員が直接交渉することは、かえって混乱をもたらす。

先述のような「TOEIC 自習システムの運用を理工系の先生にやってもらえないか」といった要請を外国語教育担当教員がする背景には、無理もないことながら、情報処理教育の現状、理系教員の教育・研究への態度、その実情等々への、外国語教育担当教員側からの無理解があると思われる。その点を具体的に指摘しながら、以下の 6 項目をたてて、提案を詳述し、この論考を終えたい。

8. 6 項目の提案（おわりに代えて）

1) コンピュータの得意な理系の大学院生などの利用

コンピュータの得意な理系の大学院生などが外国語教育担当教員から教材の選び方と授業のポイントのみを指導してもらえば、e-learning で外国語教育担当教員の負担をさして増やすことなく教養英語のコマ数を増大できる。（文部科学省の告示どおりに e-learning で単位をみとめるには役員会、評議会等の機関決定は必要）

コマ数増大を期待する大学の執行部からの要請があれば、大学院生ならそれが可能ではなかろうか。大学院生と教員では大きな違いがある。e-learning を大学院生によってやるのなら理系教員も理解を示すが、教員そのものが英語の e-learning 学習の補助をやるなどという発想は理系にはないと思われる。大学教授は社会的に評価される研究の代表者として研究を行い、その研究が反映する授業をするのが本来の任務であって、e-learning 学習の補助などに使われるべきではないと考えていると思われる。

2) 創造的な e-learning の展開

情報処理科目担当教員やセンター教員と協力して創造的な e-learning を展開するのなら、少なくともセンター教員の一部は協力するのではなからうか。(実際にセンター教員の一部が外国語教育担当教員に呼びかけ、残念ながら申請・採択とはゆかなかったものの学長裁量経費をねらって計画した例もある。) 創意工夫があれば外国語教育担当教員の e-learning への興味は深まる。

3) 学生による授業評価の電算化

学生による授業評価はコンピュータを利用すれば常時、さして努力することなくできる。(情報処理科目の学生による授業評価は Web で毎回自動的にやっている。)

4) 外部評価での連携

外部評価も、情報処理科目担当教員の場合は、コンピュータ関連業者、経済学部卒業生、県をつうじた情報関係の団体など、常に接触があるので、どのような立場、形態にも対応すべく検討が可能なのではなからうか。外国語教育担当教員の多くは、こうした接触がほとんどないので、外部評価といわれると、途方にくれる面がある。学校教育法の改正によって外部評価は避けて通れないし、英語を中心とした外国語教育が注目点であることを考えれば、「哲学派」の多い外国語教育担当教員を、そのまま外部と隔絶した状態に放置することは好ましくないと思われる。

5) 外国語教育担当教員の学内的な立場の強化

大学改革といえばコンピュータという通念があるのか、情報処理教育部会は尊重され、外国語部会は、遅れた部会なので指導の必要があるとされる傾向が否定できない。原因は先述の「哲学派」と「技術派」の違いだと考えられる。大学改革は必要としても「哲学派」を完全に大学から追い出すことには弊害がある。その功罪をにらみながら、大学内の適当な機構を通じて情報処理科目担当教

員と「ゆるやかな」連携をすることにより、現在意気消沈気味の外国語教育担当教員の立場は強化できると思われる。その方が大学全体にとっても良いのではないか。

6) 大学評価機構、文部科学省から求められる改革要請への過剰反応への対処

外国語教育担当教員の中には「哲学派」の理想を追求するあまり、企業との接触を一切拒絶する傾向もある。企業が念頭になれば、先に触れた大学評価機構、文部科学省の改革要請への過剰反応として、TOEIC の点数至上主義に陥るか、逆にその弊害を告発し、改革を根底から否定してテキスト講読中心の旧来の外国語学習に戻すかになってしまう。

外国語教育担当教員と情報処理科目担当教員、大学院生等との「ゆるやかな」連携があれば、TOEIC 点数至上主義の暴走も、テキスト講読への回帰も、ともに防ぐことが出来る。

そして冒頭のアンケート調査で紹介した BBC 支持派の学生の意見、「TOEIC の受験対策にはアカデミーが良いかもしれないが、高校時代からの延長で、飽きている面があるし、実際、英米人はあのようにゆっくり話すわけではない。BBC は話題性にも富むし、聴けるようにならねばと思って、自然に集中してしまう」を再掲して(ネットアカデミーの価値を決して否定するものでないことを強調した上で) 論考を終えたい。

学生は海外への自然な関心を喚起される中で英語の能力を伸ばしたいと考えている。学生を受け入れる企業側も、TOEIC の点数は目安に過ぎず、海外を視野に入れた自己表現力を学生に期待する。大学はそれを忘れてはならない。

WebCT の利用によって、こうした考察が出来たことが、英語 (TOEIC) クラスを担当しての最大の収穫であった。